

発表要旨

モンゴル仏教の水供養儀式の習俗とその意味 ーベイズ廟でのフィールド調査の報告ー

梅花

本発表では、『モンゴル語版ダンジョール』やホトクトラマたちの文書史料などを利用し、発表者が2017年7月と2018年10月に現地で2回行なったフィールド調査によって集めた資料と合わせて、内モンゴル・シリンホト市のベイズ廟で、毎年旧暦6月11-14日に行なわれている“ボマン・オスン・タヒル” (*buman usun takil*) という十万水供養儀式に関して、象徴人類学の角度から、その習慣、禁忌、意味などを検討する。

水は仏にささげる重要な七種類の供物の一つとして、またモンゴル地方では宗教的ではあるが民俗的ではない供物として、昔から今日までお寺や個人の部屋の仏像の前に普通に並べられてきたが、水供養儀式、あるいは十万個の供物を一時にささげる儀式については、細かく記録した文書が見つからない。ただし水供養については、『モンゴル語版ダンジョール』に、すくなくとも五種類の注釈がおさめられ、最後のガンジョールバ・ホトクトの本にも水供養のやり方などを説明した箇所がある。

『モンゴル語版ダンジョール』の注釈にしるされた水供養は、儀式と言うより修行方法だと言うべきである。主にその時となえるダラニとそれに合わせる印相(手のうごかし方)、祈願文などを説明してから、心をどうするかについてのみのべていて、水供養の準備や数、参加する人など法会の前半部分の内容は書かれていない。すなわち水を仏像の前に置いてからの後半の内容だけとなっている。

最後のガンジョールバ・ホトクトの本は、水供養のお水を皿に入れるやり方と禁忌について説明しているが、行なっていたお寺の名前や具体的な儀式については書かれていない。

現在の内モンゴル・シリンホト市のベイズ廟では、昔の水供養儀式を2012年から復活し、四日間で十万個の水供養をささげる儀式を行なっている。信徒たちは毎朝四時から夜5時までラマたちと一緒に、1回で5000個の水を特別に用意した机の上に五回繰り返し並べ、一日に25000個の水供養をささげる。毎回、水を並べたあと、隣の仏堂でラマたちが法会を始め、45分ぐらいお経を読む。その間、いろいろな禁忌や意味などを参加者たちがお互いに伝えあう。

ラマたちはこの水供養儀式の目的とか意味について、『ダンジョール』に書いてある内容のように、衆生のために、仏を喜ばせる事だと説明しているのに対し、信徒たちの説明はいろいろである。例えば「水は生命の根源だから」と言うお水を信仰する気持ち、「お水には清潔な性質があるから」と言う心を清潔にする気持ち、「お水を地蔵菩薩にささげて雨を願う」とか「お水には平等性があるから観音菩薩にささげて人間の平等を祈る」といった生活や社会に関連させた説明もある。

以上がフィールド調査から得られたいくつかの知見であるが、人類学の角度から見れば、あらゆる説明について正しいとか正しくないとか、良いとかよくないと言うことはないので、モンゴルの水供養の場合も、儀式を通じて自分自身の問題を解こうとする参加者の気持ちが象徴的に表現されるとみなすべきであろう。